

## ケアセンターけやき

症 例 概 要	利用者氏名	60代・男性	要介護5
	利用期間	2024年10月中旬～現在	
	既往歴	脳梗塞後遺症、糖尿病、脂質異常症、高脂血症	
	経 過	2021年7月脳梗塞を発症され、右片麻痺、言語障害・失語症、嚥下機能の低下で胃瘻造設となる。急性期治療後は、有料老人ホームで生活されていた。2024年4月より、ケアセンターけやき訪問看護がリハビリ目的で介入となる。リハビリ中、セラピストに「食べられるようになりたい」と話される。当初住まわれていたホームの連携医は、STの指示書は出せないと言われたことから、ケアセンターけやき有料老人ホームに転居される。	
	脳梗塞発症前は、音楽制作会社で編曲家として、多数のアーティストを手掛けていた。		

### 内 容

2024年10月中旬 ケアセンターけやきに入所。前施設では日中もベッド上で過ごし、コミュニケーションは単語レベルとの情報。事前面談に行った時も「うん」という声以外は聞かれず。流延で首元のタオルを頻繁に変えていた。

当施設入所後「口から食べる楽しみを味わうことができる」を目標に、耐久性の向上を図ることから始めた。離床時間が確保できるよう看護師は栄養剤の時間調整と体調管理、介護職員は調子を確認しながら離床を促していく、理学療法士は拘縮緩和と座位、寝返りの訓練を行った。言語聴覚士はゼリーやトロミ水から経口摂取を開始した。関わるときは、興味のあることや社会情勢を話題にし、出来るだけ声が出せるようにした。徐々に離床時間が延び、食事もムース食が摂取できるようになった。会話も可能となり、面会に来た友人から「以前は顔を見に行くだけだったが、よくしゃべるようになり、面会に来たかいがあります。」との言葉が聞かれた。

2025年6月音楽関係の友人から、過去に手掛けたアーティストのフィルムコンサートに誘われる。不安な様子だったが、長時間の移動に耐えられるよう、リハビリにて体幹の筋力強化を図りながら更に離床時間を増やしていった。当日、帰設が21時過ぎになるとのことで、経管栄養の時間もそれに合わせて調整を行い、無事にコンサートに行くことが出来た。久しぶりに会った人もおり、感動の再開となった。

その後、自信がついたようで外出意欲が高まり、10月下旬に開催された脳フェスに山口から上京した妹と参加し、楽しい時間を過ごした。今では週1回のペースで区内のイベントに外出している。

脳梗塞を患い、気持ちが塞ぎ込んでいたご利用者に対し、多職種が連携しながら寄り添い、少しずつ前向きな気持ちを引き出していきました。ご本人の「こうしたい」という思いを大切に、共に望みを叶えることができたこの取り組みは、まさにキラキラ介護賞にふさわしいと考え、推薦いたします。

## 【OUR TEAM】

○妹様（キーパーソン）：本人への励まし、連絡できない本人に代わって友人との連絡調整  
○友人：頻繁な面会にて人生の希望を持たせる原動力  
○施設ケアマネ：ケアの方針立案、意志決定の支援、多職種連携の調整  
○施設介護職員：妹様に本人の言葉を伝える、日常のリズム整えながら気持ちよく過ごせるケア  
○施設看護師：体調管理や医師との連携・栄養の調整  
○往診医：病状管理、緊急時の対応と助言  
○訪問看護OT/PT：機能回復訓練、拘縮緩和、耐久性の向上  
○訪問看護ST：口腔機能の回復訓練、経口摂取の観察・評価・助言  
○訪問歯科：口腔内の衛生管理と治療